

山中智恵子百首

永田和宏 選



山中智恵子

硝子のビルに月虧けはじめ羨望す古代緑地の神の噂など

〔空間格子〕

天空の大三角は銀河よぎり鳥たちは道をひとつししかもたぬ

深きねむりよりさまされて窓はあたらしくどこへでも私は行けさうな朝

裏ひしもののかへりをうけとめて耳ながく秋を弥勒は坐せり

はかなげに影絵うつしてゐるときに指のひとつがひかりをもちぬ

この空に雲なきを怖る夜のはて石棺のごとくしづもる古京

晩夏の空樹を吹きぬける風あればきみに眼をあてて真直にあゆむ

うつしみに何の矜恃ぞあかあかと蝸座は西に尾をしづめゆく

水甕の空ひびきあふ夏つばめものにつかざるころこゑやさし

〔紡錘〕

昏れおちて蒼き石群水走り肉にて聴きしことばあかるむ

また遠き鼓動に砕く水泡あり母の石斧をもちて久しき

晴れし日の遠心をゆく耳ありて石脈ここに彫ふかきかな

絲とんぼわが骨くぐりひとときのいのちかけりぬ夏の心に

まぼろしを語れるまでに心病みプラネタリウムに星祭るとぞ

春の獅子座脚あげ歩むこの夜すぎ きみこそはとはの歩行者

甲虫の背の斑を数ふ去にし日の近日点のその風ぐるま

朝空に雲雀の咽喉の燧石 言ひしのちにわが選ぶとき

一枚の硝子かがやき樹を距つむしろひとに捨てしは心

行きて負うかなしみぞこ鳥髪に雪降るさらば明日も降りなむ

「みずかありなむ」

この額ややすらはぬ額　いとしみのことはありし髪くらかりき

さくらばな陽に泡立つを目守りあるこの冥き遊星に人と生れて

その間ひを負へよ夕日は降ちゆき幻日のごと青旗なびく

夕こだま　明日のこだまの陽のこだま耳しひてわれはみるばかりなる

ほたる火とみゆるまで星の播るまで明暗の硝子立ちぬれてあれ

をちかたの日よみ月よみながらへば水恋鳥の髪水炎ゆるかな

葛の葉の裏返る崖すきにつつ越部六田は六月の駅

若夏の青梅進むこずるには脳も透きて歌ふ鳥あり

山百合の祭の壺はわが立てて窯変ちかきあかときのいろ

三輪山の背後より不可思議の月立てりはじめに月と呼びしひとはや

海石榴市の八十のちまたにゆきあふと天の昴星つゆふくむかな

夕鳴の炎え墮つ茜ときのまに遊行の枝の風となりゆく

心沁む青山なりし夕日の村夕日みぬ方ゆくだりきしかな

咽喉ほそきクレタの壺はまつり日の鞆を押しサチユロスるがく

秋の日の高額、染野、くれぐれと道ほそりたりみずかなりなむ

炎昼を蜻蛉の影よぎりゆきかすかに咽喉は痛みそめつも

青山はふかく射よと夕雲につばきを焼きて鳥と呼ばれき

かりがねを湖より仰ぐ髪ぬれてゆふぐれは樹にかへる帆柱

まこと薄き臉と思へ一日の秋のくだものかかげゆくかな

てのひらのうすき水脈より夏果つる日向の村の草のひとかた

すずろなるころさばしる秋風にひとを思はば人愁へしむ

いかのほり絶えなば絶えねなから父ひきしぼる春のすきのを

ただよひてその掌に死ねといひしかば虚空日月夢遠きかも

われらことばの肉を待まず一陣の夢に散り敷く沙羅の花はも

くれなるは洗ふべしみどり深むべし水茎立ちてみゆらむものを

星空のはてより木の葉降りしきり夢にも人の立ちつくすかな

ふたたびの開口のためただよる暗き螢は放ちやるべし

なべて乏しき時間に在れば相聞と思想のはさま歌還るべし

人の世のあそびのごとき雲流れ夜のみぢのはるかなりしか

夏山河のはてに思へば地図蒼き氷見境とふ駅のありにし

六連星すばるみすまるブレアデス　草の星ともよびてはかなき

「虚空日月」

「青章」

あはれこの冷えゆく星の一点日没は柘榴もつとも愛し

〔いんぼり〕 風風と記しゆき天なるもののかたちさびしき

磔鳥つぎつき発ちてとどまれる身は転逢の五月に生れし

音楽を思はず久し夕風に夢みるばかり夏の蕊落つ

この世紀いつこへ移る友らみなぬ恋うたひ老いに入らむか

ああ船首 人は美し霜月のすばるすまろう夜半めぐるらう

斎宮趾ここといへども夏の日の草の逢はけふりたりけり

秋はふいこの風吹きとほる町に来て鎌と包丁買ひて帰らむ

きみなくて今年の扇さびしかり白き扇はなかぞらに捨つ

霧たちのぼる山ゆ採り来し三枝の花はもろかりしかな

うるほへる水無月の月さしのぼる多津山の辺にいつまで病まむ

切々とピアノ連弾をちかたの山にひびきてかなしかりけり

わがいのちにふれてきはだつ沙羅の木の沙羅の花さくよろこびのことし

ひとなくてひぐらしをきく夕ころあるかなきかに生きてあらむか

沁むること夕蟬なけばわれからにみうしなひたる道のことごと

人はみな死への存在きみ逝きてわれの眠りもふかくなりゆく

短歌行

昼顔に浜撫子にひとすぢの道ありて昏む沁みてかなしき

むしばまれゐるきみの五体のまさやかにみえつととむすべもなかりき

さやさやと竹の葉の鳴る星肆にきみいまさねば誰に告げむか

スベリヒユ生ふるわが庭きみなくて幾日いく月すぎむとすらむ

水火花かやつりぐきのおほるにて夏のしじまにかたらひしこと

この世にぞ眠てふありてひとふたりあひにしものをみずかなりなむ

トラツグミとびたつときの顔みゆる何くはぬ顔してゐるものか

眼鏡より星こほれ落つしづけさに村ありしかば去りがたきかも

わが唇は炎ゆる傷口秋の日の青き峠をいつこゆかなむ

一日の旅愁をもちてひととゐるすすき石原標結ひゆかむ

秋は柘榴の割れる音して神の棲む遊星といふ地球いとしき

ひぐらしにさびしき顔をとり落し増の女を恋ふべくなりぬ

近江路の阿星入星山の名の美しき星降りたりとぞ

山辺には万朶のさくらひとりねて夢に風吹くなにぞさびしき

さらさらと骨はくだけてわが骨の骨 きみはさびしき

草摘のはるけきころ知らざりきクレソンを摘む泉のほとり

星肆

星醒記

神末

喝食天

鶺鴒界

虫の音に電話の声のひびきあふはじめの秋となりにけらしも

影のごと蟻は歩みて事もなき夏の日なりきひとと訣れき

いつの日かをとこをみな熊野ゆき（泣くのは男）と思ひきめつつ

山帽子近江女のほほゑみに薄きみどりの花の裏見つ

黄金のひかりのなかにクリムトの口吻ふ男ぬばたまの髪

夕風にははありけり青蟬に終ありけりきみ逝きしとぞ

ゆふかぜの萩むらの萩息ひきてゆきたまふきみ含蟬のきみ

きみなくて暗れたる空に月と星添ひゆくみれば昔はむとす

人の夫やさしきときをさりながらうつつのありてふりむきがたし

「夢之記」

哀しみて傷ることなき残生につゆくさ咲ける雨の庭あり

世紀末とうすみとんぼ絶えゆくは人たえむよりはかなからむか

青風吹き過ぎゆきて柿の下明眸の猫歩みすぎたり

星を踏む歌を生きたる半世紀老いらく来るなほまどひなむ

人を買はうよさびしき秋のかはたれの眉うつくしき童買はうよ

遊星のはららこ白く泡立ちてこの筭草の実秋深みたる

時のうしろのトルコ桔梗よむらさきに奪はれてゆく血潮の在り処

夢よさびしきいのちをみたり夢の中に首さし交しわれは醒めたり

空洞の脳をもちて歩めるを人知らざらむ秋の硝子よ

「風騷思女集」

歌の表記・ふり仮名は原則として歌集に準拠しています。

私の学生時代は、折しも七〇年安保・学園闘争の時代であった。お世辞にも政治的とは言えなかった私でも、デモや、棒を持って学内を走り回る日々がつづく。夕方から大学へかけて、朝の一番電車で帰宅することが多かった。徹夜で焚火をしたたり、椅子も机もなくなってしまう教室でごろんと仮眠したり、時には負傷したりして、帰ってくるのである。心は疲れているのに、火照ってどこか埃っぽい身体は容易に精神を眠らせてくれない。

山中智恵子の『みずかありなむ』を筆写し始めたのは、そ

んな頃だった。一字一字、一首一首、ていねいに大学ノートに写していく。数首から十首、時間をかけてゆつくり写す。朝帰って、まず写す。そのあいだに、ざわざわと騒だつていく精神がシンと風ぎ、火照りが鎮まり、身体から埃が落ちていくのが、ありありとわかるのであった。至福の経験と、今も私は思っている。金のない学生はいろいろの歌集を写したが、あのようなまさに鎮魂とも言えるような経験は、後にも先にも山中さんの歌集だけだった。

永田和宏（ながた・かずひろ）「塔」主宰